

小学校英語教育反対の弁

出来成訓

不覚にも11月末に体調を崩してしまった。町の多くの医院と異なり、筆者の通うクリニックには主治医は週に一度しか来ない。仕方なく安静第一と心得て体力の回復を待ち、主治医の担当日に診察を乞うた。「売薬など使わず安静に努め、気力の回復を図ったのがよかった。自然治癒力が働きましたのですよ」と言いながら、主治医は処方箋をくれた。確かに私たちの身体の中には、病気から回復しようとする自然の能力があるらしい。健康を守るための投薬は、場合によっては避けられないが、薬の使いすぎはこの大切な能力を殺してしまうこともあるという。

私事をつまらぬ話を紹介したのは、医者の方の言う自然治癒力は学生生徒にとっては自発的な勉強や自発的な向上心ではないかと思ったからである。土曜と日曜が連休となっていることが多いようだが、その日を利用して父母と語れ、スポーツや旅行をしろ、などと指図されては敵わない。自然治癒力は減退する一方だ。この国の指導層の人々は「余計なお世話」という名言のあることを忘れたらしい。

小学校・中学校は学習のためと社会人となって

活躍するための基礎教育を与える場である。それ故にここでの教育は義務教育と呼ばれる。ここではまず第一に、しつけ・規律・忍耐などの非個人的な面を教えるべきである。これがないと高学年になってからの演習中心の教育は不可能であり、社会生活に適応するのが困難になる。次に大切なのは、昔の「読み書き算盤」、今風に言えば「国語と算数」である。偏差値の向上や入試問題への適応力の養成を目的とするのではなく、国語と算数を「好きになる」ように指導するのである。日本の中高生の数学の学力は世界でも上位にあるそうだが、理数系を好まない生徒の数は着実に増えているともいう。今後の世界が理数化するのを避けられないだけに、今のままでは将来に不安を感じざるを得ない。「好き」という感情を他の言葉で定義するのは難しいが、「好き」になれば「自発的に行う」という経験則も忘れるべきではないと思われる。

今から30年近く前のこと、言語学を講じていたとき、「言語は、基本的には、人が考えるための基本材料だ」と述べたことがある。そして、日本人にとって日本語は最も大切な言語である。しかも、母語であっても言語の高度な習得は決して楽

ではない。「漫画も読まなくなった学生」「新聞の読めない学生」の存在がこれを証明する。国語教育を大切にすれば、自発的に読書し、自分で考える人も多くなると思われる。

外国語教育はいろいろな意味で大切であろうが、

それは基礎的な義務教育が充分に行われているという前提があつての話である。日本の全小学生平等に（とは強制的に）英語教育を実施するのが本当に有益であろうか。